

II. 特別講演

甲状腺機能低下症 Update

— 甲状腺の異常発生による疾患群 —

群馬大学大学院

医学系研究科小児生体防御学

鬼形和道

2 胃癌の異時性肝転移に対する切除術施行後、腹膜播種に対し Paclitaxel (PTX) が奏効した1例

佐野 文・宮下 薫・藍澤喜久雄

鳥越 貴行・森岡 伸浩

燕労災病院外科

症例は62歳、男性。2003年1月20日、胃全摘、2群郭清施行(ss,N1,P0,H0) stage II。2005年3月、肝S8に3cmの転移を認め、3月31日肝部分切除術施行。4月15日よりTS-1 100mg/day内服開始。11月22日、腫瘍マーカーの上昇認め、TS-1 80mg/day (2投2休)、PTX 90mg/body (Day 1, 8) 開始。12月2日、CTにて食道空腸吻合部近傍およびSchnitzler転移を確認。2006年5月23日、TS-1/PTX, 9サイクル終了。5月26日、CT上腫瘍の消失。9月現在14クール施行しているが再発傾向はない。

【まとめ】進行・再発胃癌、特に腹膜播種に対しPTXを用いた化学療法が奏効した症例を経験した。

第263回新潟外科集談会

日時 平成18年12月2日(土)

午後1時～4時

会場 新潟県医師会館

大講堂(3F)

1 ヘルニア腫瘍で発見された進行胃癌の1例

小川 勇一・蛭川 浩史・田所 央

佐藤征二郎・多田 哲也

立川総合病院外科

ヘルニア嚢内に胃癌腹膜播種巣を認めた1例を経験した。症例は60歳男性、左鼠径ヘルニアの診断で手術を施行。ヘルニア嚢を開放すると、腹膜に多数の結節を認め、病理組織学的検査で腹膜播種と診断された。術式はIlio-pubic tract repairを行った。術後行った上部消化管内視鏡で、2型進行胃癌を認めた。CDDP, TS-1による化学療法を施行後、試験開腹したが腹膜播種の遺残があり、原発巣は切除せず化学療法を施行中である。

自験例は転移性ヘルニア嚢腫瘍に分類され、頻度は鼠径ヘルニア手術の0.07%と稀である。鼠径ヘルニア嚢の注意深い観察が重要と考えられた。

3 胃癌穿孔4例の臨床病理学的検討

小川 洋・遠藤 和彦・下山 雅朗

清水 孝王・木村 愛彦・中川 拓

小野 貴史・白戸 圭介

厚生連秋田組合総合病院外科

1997年4月からの約9年間に当科で施行された胃癌手術総数508例中、穿孔例は4例(0.8%)である。4例とも術前診断は胃癌であり、2例は膿瘍形成を伴う限局性腹膜炎の状態以待機的手術を施行。2例は汎発性腹膜炎で緊急手術を施行した。主たる占拠部位はLM領域が2例、L領域が2例で、4例すべてに幽門側胃切除D2を施行した。肉眼型は全例2型で、組織型は低分化腺癌3例、中分化腺癌が1例であった。いずれの症例も癌部にて穿孔を起こしていたが、最終病期は、2例がStage I Bで根治度A、2例がStage III Aで根治度Bであった。4例とも現在まで無再発生存中である。

【結語】緊急手術、待機手術を問わず、穿孔例で

も可能な限り治癒切除がなされれば、良好な予後が期待出来ると考えられた。

4 腹膜原発 c-KIT 陽性腫瘍の 1 例

富田 広・加納 恒久・牧野 春彦
県立坂町病院外科

症例は 75 歳，男性。肺気腫にて当院内科通院中。経過観察目的にて胸部 CT 施行。左横隔膜下に長径 8cm の腫瘍を指摘された。精査の結果胃 gastrointestinal stromal tumor (GIST) の疑いとなり，手術を施行した。術中肉眼所見にて腫瘍は脾門部に存在し，胃後壁と接してはいたが，連続性は無く，胃原発とは考えがたく，腹膜原発腫瘍と考え，腫瘍の切除を行った。脾，脾原発の腫瘍でもなかった。また，他の消化管に異常は認めず，他の消化管からの転移ではなかった。病理組織診にて c-KIT，CD34 陽性であった。GIST 以外で c-KIT が陽性となる腫瘍として，肥満細胞腫，精巣腫瘍，肺小細胞癌，乳癌が報告されている。GIST の腹膜原発の報告は散見されるが，腹膜原発で c-KIT が陽性となる腫瘍は極めてまれである。

5 各病態における血中 Plasminogen activator inhibitor - 1 (PAI-1) 濃度とその意義

中塚 英樹・須田 和敬・松木 淳
長谷川 潤・島影 尚弘・内田 克之
岡本 直孝・田島 健三

長岡赤十字病院外科

【目的】 エンドトキシンや炎症性メディエーターによる血管内皮細胞からの Plasminogen activator inhibitor - 1 (PAI-1) 産生調節機構が DIC, MOF の重要な契機のひとつとして考えられている。われわれは術後あるいは術後合併症発症時に PAI-1 を測定し，DIC や MOF の契機となり得る血管内皮障害を早期に判別できるかどうか検討した。

【方法】 消化器手術をうけた 26 名において，術後あるいは重篤合併症発生時に血中 PAI-1 を計

測した。

【結果】 over all での検討では，同時に計測された WBC, CRP, PLT, FDP, D-dimer に対して有意な相関はみられなかった。経時的にみた症例のうち，高値例 (200ng/ml 以上) では，全例 DIC を発症していた。

【考察】 PAI-1 は血管内皮細胞障害および線溶系調節障害をあらわす鋭敏な検査であり，様々な病態において，DIC, MOF への移行を早期に知る指標となる可能性が示唆された。

6 術前非浸潤性乳管癌 (DCIS) 診断症例に対する乳房温存療法 (BCT) とセンチネルリンパ節生検 (SLNB) の検討

神林智寿子・佐藤 信昭・田中 乙雄
梨本 篤・土屋 嘉昭・藪崎 裕
瀧井 康公・中川 悟・野村 達也
本間 慶一*

県立がんセンター外科
同 病理部*

1998 ~ 2006 年の間に DCIS の術前診断で手術施行した 80 例 (平均年齢 52 歳，観察期間中央値 31M) に対し BCT と SLNB を検討。

【結果】 術後最終病理は，DCIS 70 例，浸潤性乳管癌 (IDC) 10 例であった。IDC のうち 2 例が腋窩リンパ節転移陽性であった。IDC 症例は病変範囲が広い例が多く，このような症例では術前 DCIS の診断でも SLNB が有用と思われた。BCT は 41 例に施行し断端陽性は 10 例 (24.3%) であったが臨床病理学的な因子との有意な関連はなかった。残存乳房内再発は 2 例 (4.9%) であった。症例を選んだ BCT は DCIS でも可能と考える。

7 虫垂内異物の 1 例

小森登志江・内藤 真一・新田 幸壽
飯沼 泰史*

新潟市民病院小児外科
同 救命救急センター*

症例は 11 ヶ月の男児。携帯ストラップの金属